文化

国際シンポ　人種概念の普遍性を問う―

根本的な洗い直し必要

二大論争と異なる見方可能

竹沢　泰子

「人種概念の普遍性を問う―植民地主義、国民国家、創られた神話」と題した京都大学人文科学研究所主催の国際シンポジウムが昨年九月十九日、京都市左京区の国立京都国際会館において開催された（昨年十月十日付本紙に記事）。このシンポジウムは、自然人類学、文化人類学、社会学、歴史学という学術領域と、欧米だけでなくアジアとアフリカも含めた地理的空間という、二つの大きな基軸の横断を試みたものであった。このような企画は日本では初めてであり、世界的にもあまり例が知られていない。人種を現在の研究テーマとする私がこのような国際シンポジウムを企画したのは、学問における従来の人種概念自体が、現実の人種差別や偏見の存続あるいは台頭に寄与しているのであり、この概念の根本的な洗い直しが必要だと感じたからであった。

欧米では二つの立場

欧米の人文・社会科学の研究者の間では人種概念の起源をめぐって、二つの立場で論争がある。一つは、人種差別は古代から世界諸地域において普遍的に存在するという説、もう一つは、あくまでも近代における欧米の国内外植民地主義の産物と見なす説である。私が問題提起したのは、このような二大論争とは異なる見方が可能ではないかというものである。すなわち、古代に身体形質に基づく偏見は認められても、時空間を超えて人間に付随すると考えられるような普遍性の根拠は確認できない。他方、近代以前にもまた欧米以外でも、名称こそ異なれ、単に偏見レベルにとどまらない、また「民族」概念にも単純には回収されない、「人種」に相当する概念に基づく差別は存在したのではないか。集団間の生来的と信じられる差異が、明確な社会的境界を伴いながら政治的経済的機構と結託する現象は、欧米から人種概念を受容する以前にも諸地域で存在していたし、前近代からの流れから切断しては把握できない現象が多々あるのではないか、という問いである。日本における近世の身分差別もその例であろう。

その上で、近代科学の延長線上に伴い台頭する欧米の人種分類論が、搾取や抑圧を正当化できる「科学的な」お墨付きとして消費され、世界的規模で圧倒的な影響力を及ぼしたことは否めない。ただその人種分類論は、根源的には白色を善、黒色を悪とするユダヤ＝キリスト教文化圏の色のイデオロギーに支配されたものであり、皮膚色を他者認識の上で最重要視した西欧のローカル・カルチャーが「近代科学」という威光の下に世界諸地域に蔓延したにすぎないのである。注目すべきことは、中心的な人類学者が、アメリカに限らずフランスやイギリスにおいても、奴隷制擁護論者かその共鳴者であったことである。シンポジウムへ米英から招聘した研究者たちが、人種概念のアメリカ起源説を主張したのもこのような歴史的経緯からであろうが、それはあくまでも「黒人」に対する偏見の次元の話である。

疑似科学の分類論

このような疑似科学の人種分類論は白人を頂点、黒人を底辺として、諸「人種」を序列階梯に位置づけたが、そのような「西洋」の覇権への抵抗として、東アジアでは独自の人種思想が芽生える。列強の進出と在米中国人移民排斥によって「白種」を意識せざるをえなくなった中国が、神話上の「黄帝」を動員して「黄種」の中心として自らの優位を主張する動き、あるいは日本の日露戦争勝利によって黄禍論が扇動的に広がり、在米日本人移民排斥やパリ講和条約での失敗により脱亜入欧の道を断念して、南洋の資源確保の口実としながらも大東亜共栄圏構想へと突入する思想は、「白色人種」との意識上の対立構図なしでは説明しがたいものである。

このシンポジウムの目的の一つは、欧米以外の社会的脈略から「人種」概念について考えることはできないか、また現在いわゆる「白人」「黒人」間の人種関係にあまりに偏重しがちな人種をめぐる学問的言説の中心をずらすことはできないものかというものであった。もう一つの大きな問題提起は、自然人類学者や集団遺伝学者らの人間集団をめぐる研究への挑発的な問いかけであったが、その紹介は別の機会に譲りたい。

（京都大学人文科学研究所助教授・文化人類学）

人種概念を主題とした京大人文研の国際シンポジウム（02年9月、国立京都国際会館）

たけざわ・やすこ氏　神戸市生まれ。米国ワシントン大学大学院博士課程修了。専門は人種・エスニシティ論、移民研究。著書に『日系アメリカ人のエスニシティ』、共著に『岩波文化人類学講座　移動の民族誌』『日米危機の起源と排日移民法』など。